

## 時代の終止符

佐藤茂さんの訃報が届いた。佐藤小屋の先代オーナーである。それなりのお歳だから、訃報は平静な気持ちで受け止めることができたが、一つの時代の終焉を感じた。息子の保さんに代を譲ってからも、小屋で茂さんの顔を見ることはあったのに、一昨年夏に立ち寄った時には、顔を見ることはできなかった。

ぼくにとって佐藤小屋は、富士山雪訓（せっくん）の象徴だ。初めての雪訓は、昭和 38 年 11 月下旬。馬返しまではトラックに乗せられて行った記憶がある。小屋周辺には先客のテントが設営済みだったので、お中道だったか、ちょっとしたスペースにテントを張った。あの瓦礫の斜面に、頼り気なさそうにポールと突っ立っている写真がアルバムに残っている。これを皮切りに毎年富士の雪訓には参加した。山岳会時代には小屋に泊まることはなかったが、佐藤小屋の存在は安心の拠り所だった。

昭和山岳会を卒業して蒼山会同人を創立、富士の雪訓は継続した。温暖化のためか初冬の富士の積雪が少なくなってきたので、実施日を 11 月下旬から 12 月に繰り下げた。1981 年春、ヒマラヤ登山にチャレンジ、ネパールから帰国後、無名山塾を誕生させた。富士の雪訓は継続した。前夜馬返しにテントを張り、3 時起床 4 時出発で行動した。必修の基本ステップと位置づけたので、毎年 30 人以上がトレーニングに参加した。2 合目で小休止、4 合目で小休止、佐藤小屋の前で中休止として雪訓の準備をする。チーフリーダーであるぼくは、小屋に入って茂さんにご挨拶し、登山届け（メンバーリスト）を預かって貰い、休憩料をまとめてお渡しする。こうしたお付き合いが毎年続くようになった。

そうこうするうちに、中高年登山ブームが招来、無名山塾に中高年バージョンの遠足倶楽部を併設。元気な女性がモンブランに登ってみたいとおっしゃる。それじゃあ雪訓やらなきゃね、と言う次第で遠足倶楽部のメニューに雪訓が入った。彼らがいくらお元気でも、馬返しにテント泊で 3 時起床 4 時出発での行動はシンドイ。山塾本科の雪訓とは別に、1 日目に 5 合目まで上がって佐藤小屋泊、2 日目午前中にみっちり雪訓、小屋に戻って昼食後下山という中高年バージョンのプログラムを組み立てた。

山塾本科の実施日とはずらして、年が明けた第 2 の土・日あたりに講習日を設定。ぼくは本科から離れて、遠足倶楽部の雪訓講師を担当するようになった。いつのことだったろう、ストーブの前にデンと腰を降ろしているのが茂さんでなく、保さんになっていた。この 50 年、どうしても外せない用事で 2、3 回サボったことはあるが、気分としては皆勤賞の富士雪訓、それが今年度、1 月 12 日（日）～13 日（月・祝）で募集していた雪訓に申し込みがゼロ。そして 3 月、茂さんの訃報が届く。山がすべて、シャカリキになって生きていくのがカッコ良かった時代の、幕は下ろされる。